

原子力平和利用と核不拡散・ 核セキュリティに係る国際フォーラム 学生セッション報告



2021年3月9日

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構
核不拡散・核セキュリティ総合支援センター (ISCN)

Integrated Support Center for Nuclear Nonproliferation and Nuclear Security

令和2年度第2回核不拡散科学技術フォーラム

学生セッションの目的

2020年12月9日開催の国際フォーラム前日に、次の10年後に社会のコアとなる若者の視点からの意見を報告するための前夜祭として、学生セッション「未来を切り拓く“刃”(YAIBA)」をオンラインで開催した。

- このセッションの学生パネリストは核不拡散や核セキュリティを専攻しているわけではなく、バックグラウンドは様々であった。
- 議論の内容についても専門的なものとする事は目指さず、本分野に長年携わってきた専門家による参加が多くなりがちな国際フォーラムにおいて若い学生の視点を「刃」として吹き込むことを意図した。

以下の学生セッション概要は、主催者であるJAEAの責任においてまとめたものである。

学生セッションの概要

- **開催日時** : 令和2年12月8日(火)
16:00~18:30
- **開催方法** : オンライン開催
- **参加者** : 68名

＜構成＞

➤ **第1部 「夏期実習から見るISCNのお仕事」**

今年度ISCNの夏期実習に参加した学生4名が、その内容や経験から見えたISCNの仕事について紹介

➤ **第2部 「学生の皆さんの意見を国際フォーラムへ」**

「核の脅威のない世界」に向けて国際社会や日本、あるいはJAEAやISCNが対処すべき課題、期待することなどについて、学生パネリストを中心に議論

パネリスト

(学生)

白藤 雅也 氏 (広島大学大学院先進理工系科学研究科M1)

立野 嵩陽 氏 (長岡技術科学大学大学院工学研究科 M1)

栗城 祐輔 氏 (東海大学工学部原子力工学科 B3)

加賀山 雄一 氏 (東京工業大学大学院環境・社会理工学院 M1)

(ISCN)

センター長

直井 洋介

能力構築国際支援室長

井上尚子

(ファシリテーター)

ISCN

学生パネリスト

			
白藤 雅也 広島大学・M1	立野 嵩陽 長岡技術大・M1	加賀山 雄一 東工大・M1	栗城 祐輔 東海大・B3

<h3 style="color: #0056b3; text-decoration: underline;">ISCNパネリスト</h3>  <p>直井 洋介 ISCNセンター長</p>	<h3 style="color: #0056b3; text-decoration: underline;">ファシリテーター</h3>  <p>井上 尚子 ISCN能力構築国際支援室長</p>
--	---



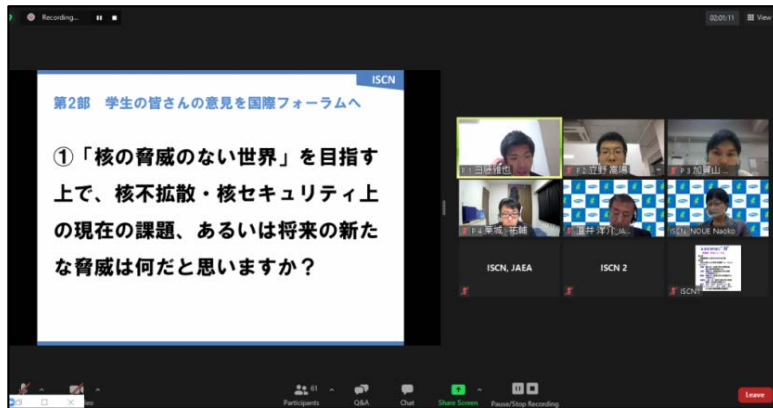
第1部「夏期実習から見るISCNのお仕事」

氏名	プレゼンテーションのテーマ
白藤 雅也 氏	核不拡散・核セキュリティ人材育成事業の効果測定
立野 嵩陽 氏	ソビエト連邦崩壊に伴う核兵器継承国における非核化達成の事例研究および他国における適用性
加賀山 雄一 氏	核鑑識のプロセスに従った体験・データ分析実習
栗城 祐輔 氏	HYSPLITを用いた核実験によるXe-133の拡散予測及び解析

- 2020年度のISCNにおける夏期実習生であり、本セッションのパネリストである4名から、各自の実習内容や、その経験から見えたISCNの業務等についてのプレゼンテーションが行われた。
- 視聴者からは、「大学でこの分野の講義があるか」との質問があった。パネリストのうち1名は本分野の専攻であり講義が設置されているとのことであったが、他3名からは「ほとんどない」という回答であり、大学での教育機会の充実が課題の一つであることが窺われた。また、「大学で得られない機会を求めて本実習に参加した」という声も聞かれた。

第2部 「学生の皆さんの意見を国際フォーラムへ」

ISCN能力構築国際支援室長をファシリテーターとして、学生パネリスト4名及びISCNセンター長により、以下のテーマでパネルディスカッションを実施した。



- ① 「核の脅威のない世界」を目指す上で、核不拡散・核セキュリティ上の現在の課題、あるいは将来の新たな脅威は何だと思いませんか？
- ② その脅威に対して国内・国際社会、制度、技術、人材等に関して何が必要になると思いませんか？
- ③ ISCNあるいはJAEAは、そういった必要性に対して何ができると思いませんか？
- ④ 10年後、そういった脅威に対して自分はどう受け止め、考え、行動していきたいと思いませんか？

主な意見

- 「核の脅威のない世界」を目指す上での脅威や課題として、まず、「核の脅威のない世界」についてのイメージが共有できていないことが挙げられた。具体的には、「核の脅威のない世界」とは、「核兵器のない世界」のことか、あるいは「核兵器が管理された世界」のことか等、異なる見方があり、核兵器禁止条約に対する認識や、それに向かつての世界の足並みが揃っていないことが述べられた。
- また、核不拡散・核セキュリティ分野の存在について、国内外を問わず、多くの人の理解が不足していること、報道は日本がなぜ核兵器禁止条約を批准しないのかを語っていないことが挙げられた。
- 「将来の新たな脅威」としては、冷戦時代の脅威は核戦争であったが、今の脅威は宗教・民族対立からの「小さい戦争」（ダーティボム等）であり、原子力事業導入に伴う新興国での核テロの可能性もあることが挙げられた。
- これらの脅威に対しては、「教育の充実が重要であること」、「国民・世界の核不拡散・核セキュリティに対する認知度を上昇させること」が提言された。

主な意見（続き）

- 具体的な方策としては、学校教育においては、核不拡散・核セキュリティの取り組みについても核兵器の脅威と併せて義務教育に組み込むべきであり、また、教える人の育成が必要であること、薬物乱用防止授業や交通安全教育で行われているような「出張授業」を行うこと、給食の時間にアニメ・ビデオやビデオを流して「触れる場」を作ることにより、核不拡散・核セキュリティ分野の魅力を高めることが挙げられた。
- さらに、これらの「脅威に対する認識や取組、教材」を他国と共有することで、新興国での核テロの脅威を低減化できるのではないかという意見が出された。
- JAEAあるいはISCNへの提言としては、「政治家や国際機関、他国のトップを突き上げること」「人材の流動性を高めること」「国際機関（IAEA、CTBTO）、国の機関と連携すること」「トレーニングを継続すること」の他、「映像教材などを開発・制作して国内外の教育に活用すること」、「大学、中等教育へのお出張講義を充実すること」、「YouTubeなどの媒体を活用すること」等が挙げられた。

国際フォーラム2020での報告

翌12月9日にオンライン開催された国際フォーラムのパネルディスカッションに、学生セッション代表のパネリストがオンラインで参加し、前日取りまとめられた内容をベースとして報告が行われた。

2020原子力平和利用と核不拡散・核セキュリティに係る国際フォーラム
The International Forum on Peaceful Use of Nuclear Energy, Nuclear Nonproliferation and Nuclear Security

JAEA

LIVE

前夜祭からの提言

- **教育の充実が重要**
 - 国民・世界の核不拡散・核セキュリティに対する認知度の上昇
- 学校教育は核不拡散・核セキュリティの取り組みも教えるべき
 - 義務教育に組み込む（核兵器の脅威と併せる）
 - **教える人の育成が必要**
 - 足並みをそろえるためには数多く、継続して行う
- 伝える場、触れる機会を設ける
 - 出張講義（例：薬物乱用防止授業、交通安全教育）
 - 触れる機会を増やす（給食の間に流すアニメ・ビデオ）
- 知って「行動できる人」も必要
 - 核不拡散・核セキュリティ分野の魅力を上げる
 - 事業者等に対してインセンティブ
- 脅威や取組、教材を他国と共有→新興国での核テロの脅威を低減化

学ぶ

伝える

|| SHIRAFUJI Masaya

『第1回 核セキュリティ・サミット』から10年 ～ISCNが刻む「未来へのMilestone」～
"10 years since the first Nuclear Security Summit" - ISCN's "Milestone for the Future" -

今回の学生セッションを振り返って

- 今回の学生セッションにおいて特に問題意識として提起されたのは、この分野の教育の充実の必要性であったが、既存の平和教育との関連付けや教育する側の育成、また学んだ人がそれをさらに伝えるというサイクルの重要性や、そもそも本分野に意識が向いていない人への働きかけ等、現実的かつ具体的な視点が示された。
- 加えて、YouTubeのような既存のプラットフォームでのコンテンツの展開、本分野の学生・若手に対するインセンティブの向上等、学生らしいフレッシュな意見も多く出された。
- 今回の学生セッションは、国際フォーラムの開催にあたり初めての試みであったが、こうした提言により本セッションの当初の目的は十分に達成されたと考えられる。
- 今回の学生セッションについては、報道でも大きく取り上げていただいたところである。今後も国際フォーラムに「若い学生の観点」を吹き込むために、継続して実施していきたいと考えている。